

〈特集〉 評論教材を考える

評論「読解力」から評論「指導力」へ

—早稲田大学教育学部国語国文学科「評論教材の研究」の実践報告—

榎 本 隆 之

キーワード 評論 教材開発 授業開発 入試問題

「評論教材の研究」は、早稲田大学教育学部国語国文学科で二〇一二年度に新設された科目である。本稿では、この科目が設置された背景・カリキュラム内容・実践の成果・今後の課題について、三年間にわたって科目を担当した立場から報告する。

一、科目の概要

(ア) 科目の概要

「評論教材の研究」は、早稲田大学教育学部の広域選択科目の一つである。半期十五回の授業で構成され、対象は学部二・四年生で、主なターゲットは中等教育現場に就職することを志望する学

生である。この科目は教職課程科目ではないが、位置づけとしては、教職課程の「教科に関する科目」に準じる、その一分野に特化した国語科教員養成のための科目である。

(イ) 科目設置の背景

この科目が設置された背景には、教育学部の国語科教員養成において評論指導の分野を強化する意図があった。教育学部には、国語国文学の諸領域にわたる充実したカリキュラムが設置されているが、評論教材の指導に焦点化した科目はこれまで置かれていなかった。そこで、中等教育の国語科における評論指導に限定して、評論を読む力、評論を教える力、さらに評論教材を開発する力を養う科目を設けることとした。

大学入試センター試験・国公立二次・私大入試一般において、

評論問題が広く採用されている現状があり、それに対応するカリキュラムが学習塾・予備校・一部の高校等で組まれているにもかかわらず、大学の国語科教員養成カリキュラムにはこれまで評論教材・評論問題の指導に対応する科目が存在せず、いわば盲点となっていた。そこで、上は大学入試評論の難問をひとつの極として、もう一方の極には高校の平易な教科書教材や中学校の説明文教材を視野に入れて、さまざまな難易度の教材をいかに面白く料理して教えられるか、その指導力を育成するものとしてこの科目が構想された。

今日、教員就職を志望する学生にとって、資格（教員免許）を取得することよりも、採用選考に合格することのほうが困難な関門となっている。採用選考の倍率の高さに比して、教員免許は教職課程を恙なく履修さえすれば必ず手に入れることができるからである。そうした事情が、教職課程への批判となつて表れており、「教員としての基礎的な力を十分に身に付けていない」「教員養成段階において、教科指導、生徒指導、学級経営等の職務を的確に実践できる力を育成するなど何らかの対応が求められている」等の指摘がなされている。そうした批判に対応するかたちで、教員養成の高度化を図るために設けられた科目の一つが「評論教材の研究」である。

二、科目の目標

この科目の到達目標として掲げたのは次の三点である。

（ア）評論教材の指導方法の育成

（イ）評論教材の開発方法の育成

（ウ）新任教員における自己研鑽スキルの育成

（ア）評論教材の指導方法の育成

第一の目標は、評論教材に特化して、教材研究・指導方法研究を行うことである。

評論「読解力」が中等教育の学習者に求められるとするならば、中等教育の指導者に求められるのは評論「指導力」である。評論「指導力」とは、優れた評論「読解力」の基盤の上に、学習者のレベルと目的に合わせて適切な教材を選択したり、教材の扱い方を工夫したりする力である。専門的力量と呼ぶにふさわしい評論「指導力」を育成することが第一の目標である。

（イ）評論教材の開発方法の育成

教科書の評論教材は、必ずしも難易度順に配列されているわけでもなければ、体系的に配列されているわけでもない。教科書教材を取捨選択して、必要に応じて並べ替え、ときに一部をカットしたり、補助教材を追加したりする作業は、多くの国語科教員が日常的に行っていることである。そこにはすでに、教材編集のプロセスがあり、教材開発の萌芽がある。教科書教材だけを扱うことが大多数の教育現場で行われていることであるとしても、所与の教科書教材しか扱えない「指導力」では、専門的力量と呼ぶにはふさわしくない。

そこでこの科目では、第二の目標として、評論教材の開発方法

を育成することを設定した。まず評論教材の素材を発掘して、それを教材化（単元開発）し、そして作成した教材を模擬授業のなかで指導して、評価（試験問題・入試問題作成を含む）するまでの一連の流れを実際に体験させることを目標とした。そこには、語彙の指導、文章構成把握の指導、教材が置かれたコンテキストの解説、さらに教材そのものを吟味・評価させる指導等が含まれている。受講生（学部学生）には少しハードルが高いが、オーダード教材を作成させる作業を通じて、レディメイド教材の価値を判断できる資質を育成することをめざした。

（ウ）新任教員における自己研鑽スキルの育成

第三の目標は、上記二点（評論教材の指導と開発と）を、教員としてのキャリアの中で中長期的に向上させていく手段を指導することである。

評論教材・評論入試問題が扱っている内容は多岐にわたり、現代の自然科学・社会科学・人文科学の多くのジャンルに及ぶ。とうてい、短期間で習得できるものではない。しかも、それらの傾向は思潮の変化を反映しつつ、中長期的に変遷していく。ひと昔前に代表的といわれていた教材は、今日すでに使われなくなっていたりする。政治社会的な影響によって、教材が消えていく場合もある。さらに、教員自身が辞令によって、例えば職業高校から進学重点校に異動になって、指導対象が変化することもある。そうした評論教材の内容の多様性とその移り変わりと学習者集団の変化とに、国語科教員はその都度対応していかなければならない。

そこで、この科目では、受講生が教員就職した後、五年後十年後へむけてどのような資質を養ってゆけばよいのかを、できるだけ具体的に示すことを、目標の一つに含めた。

三、「評論教材の研究」のカリキュラム

（ア）授業計画

二〇一四年度の授業計画は次の通りである。

第一回	読解力①	試験問題例を解いてみる・その模擬指導
第二回	読解力②	試験問題例の分析
第三回	教材開発①	評論教材の指導事例の分析
第四回	教材開発②	語彙指導の教材作成（レポート）
	指導力①	評論教材の指導実践例の分析
	模擬授業①	語彙指導
	教材開発③	評論教材の素材集め（レポート）
第五回	模擬授業②	語彙指導
	入試問題①	過去入試問題の分析（１）
第六回	教材開発④	教材の難易度と指導の難易度
	入試問題②	過去入試問題の分析（２）
	入試問題③	入試問題案作成（レポート）
第七回	指導力②	指導内容の焦点化・体系化
	入試問題④	入試問題の作成（１）
第八回	指導力③	ビジュアル化と教具メディア
	入試問題⑤	入試問題の作成（２）
第九回	指導力④	発問と作問、評価

- 第一〇回 入試問題⑥ 入試問題の作成(3)
 教材開発⑤ コンテキストをどう教えるか
 入試問題⑦ 入試問題の作成(4)
 教材開発⑥ 模擬授業指導案作成(レポート)
 コンテキストをどう教えるか
 第一一回 教材開発⑦ 模擬授業指導案の検討
 第二回 模擬授業③ 「読解力」指導
 第三回 模擬授業④ 「読解力」指導
 第一四回 模擬授業⑤ 「読解力」指導
 第五回 「読解力」と「指導力」・学力観・評価・自己研鑽

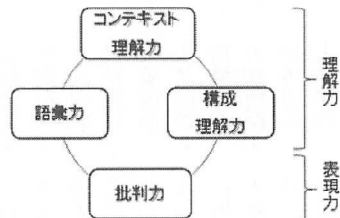
(イ) カリキュラムのキーポイント

右の授業計画は、次の四点を組み合わせることによって編成されている。

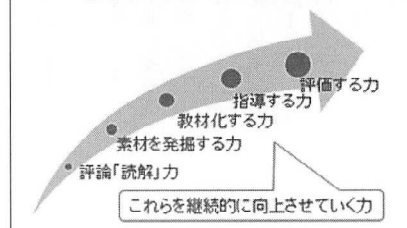
- ① 評論「読解力」の分析
- ② 評論「指導力」の育成
- ③ 入試問題作成スキルの育成
- ④ 自己研鑽スキルの育成

①②に関しては、「読解力」と「指導力」とを構造化し、次のようなモデルで提示した。モデルを提示した目的は、評論の学習内容・指導過程を可視化することにある。評論教材の指導は、ときとして内容主義に、あるいは逆に形式主義に陥りやすい。すなわち、個々の教材内容に埋没する傾向と、個々の教材内容の表層に留まる傾向とに分かれやすい。そうしたリスクを低減する対策の一つとして、評論教材を用いて何を教えるのかを視覚的に表すことにした。

評論「読解力」の要素 (学習者に求められる能力)



評論「指導力」の要素 (教員に求められる要素)



鶴田清司は文学教材の指導を構造化して、a〈教材内容〉、b〈教科内容〉、c〈教育内容〉の三層構造モデルを提示しているが、それに準じて評論教材版モデルの作成を試みたのが上段の評論「読解力」の要素である。下段は教員における「指導力」の要素を示している。

① 評論「読解力」の分析

評論「読解力」の用語について説明を加えると、まず「語彙力」の範疇は、指示語・接続語といった機能語をはじめとして、具体・抽象・主観・客観などの基本的な語彙、熟語・外来語・略語などの知識、(たとえば伝統社会なら)民族・民俗・共同体・周縁などテーマ別のテクニカルタームに及ぶ。評論が「解らない」原因の一つ

は用いられている語彙の難解さにあるが、たとえ語彙の意味が解つても文脈の中で語彙の意味を定位できない場合もある。語彙(単語)・レベルの理解は、したがって、文節・文レベル・段落レベル・文章全体の理解と密接に関連している。

次に、部分と部分、段落と段落を関連づけたリ、部分を全体に位置づけたリする能力を「構成理解力」とした。ここには、キーワード・キーセンテンスを抜き出したり、指示語の指示内容を捉えたり、段落間の関係を把握したり、対比関係を見抜いたり、同義関係を指摘したりといった、論の構造をおさえる要素が広く含まれる。論の構造へのアプローチは多岐にわたリ、ある特定の方法がすべての教材に対して万能に適用できるわけではない。この科目の中で扱えるアプローチ方法は、残念ながらごく一端に過ぎない。

「コンテキスト理解力」の「コンテキスト」とは、ある評論が依拠しているジャンルにおける通念のことである。石原千秋は「文章の論理を成り立たせている大前提」のことを「枠組み」と呼び、「枠組みとは、時代によつても、国によつても、また論じる人によつても交換可能な軽やかなもの」であるとしている。この「枠組み」を、評論教材の受動的な解釈に用いる場合に、この科目ではそれを「コンテキスト理解力」と呼び、一方、能動的に評論教材を評価しつつ表現活動につなげていく場合にそれを「批判力」と呼ぶこととした。「コンテキスト理解力」と「批判力」との違いは、無批判に受け容れるか否か、という姿勢の違いにある。

「批判力」とは、したがって、教材を相対化して捉えて、その内容について異なる立場から批評したり、その表現について吟味し

たり、さらにテキストをもとに新たな課題を設定してそれを討論などにより解決する力を指している。ここには、いわゆるクリティカル・リーディングの領域、またはPISA読解力(リーディングリテラシー)のうち「熟考・評価」の領域に相当するものが含まれる。評論教材は、とくに入試問題を扱う場合などは、受動的(没主体的)な学習になりやすい特性がある。しかし、だからこそ評論の学習をアクティブなものとして開いていく可能性を追求する必要があるだろう。

以上が「読解力」の各要素についての概略である。これらの要素を有機的に組み合わせることを、評論「読解力」の基本的な枠組みとして措置した。

その上で、「評論教材の研究」カリキュラムとして、既存の試験問題例・指導案例・指導実践例に、評論「読解力」要素がどのように展開されているかを、受講生に分析させる課題を出した。そうした課題を通じて受講生は、評論教材において、体系的に指導しやすい要素と、そうでないものとの差を認識していった。

② 評論「指導力」の育成

「指導力」の育成においては、教材開発と授業開発の両側面を実践させるカリキュラムを用意した。

まず、教材開発として、書籍から評論教材の素材を切り取つてきて、それを教材化する課題を用意した。受講生には、各自、得意分野にしたい評論ジャンルを選んでもらい、そのジャンルから教材の素材を持ち寄つてもらった。しかし、それを教材として仕立てるにあたり、「適切な分量」の「適切な語彙レベル」の「適切

な論理展開」の「適切な内容」の素材を切り取ることが、いかに難しいかを体験してもらった結果となった。

次に、授業開発として、指導案作成と、それを実践（模擬授業）する課題を用意した。指導案作成においては、扱う評論教材への的確な理解や、そのジャンルへの深い洞察、その前後の単元との脈絡・系統性が必要であるのももちろんだが、受講生ごとに敢えて指導の手順を変えて作成してもらった。例えば、語句指導から始めるケース、筆者紹介から始めるケース、ジャンルの解説から始めるケース、論理展開から始めるケース、などのバリエーションを設定して、それぞれの利点欠点が相互比較できるようにした。そして、それを教壇実践するにあたっては、メディア（黒板・プリント・画像・映像・スクリーン・パワーポイント・書画カメラ等）のバリエーションを設定して、指導法のストックを増やすように促した。

③ 入試問題の作成

入試問題の作成は、まず過去の入試問題例を分析するところから始めた。既存の設問の作問意図を考え、どれが悪問でどれが良問であるかなどを検討した。その上で、時間をかけて評論素材を選定し、設問を作成し、選択肢の文言を修正し、正答の妥当性を吟味していった。

その過程で、入試問題と定期テスト問題との違いをクローズアップして、それぞれの目的の違いが、どういうところに反映しているかを検討した。入試問題作成は、必ずしも全ての初任者教員に必要なスキルではないかもしれないが、いずれは求められるスキ

ルであり、評論指導と密接に関わるという意味で、やはり、現場に出たときに役立つ実践的な技能の一つであるといえる。

④ 自己研鑽スキルの育成

四項目として、受講生が教員就職した後、中長期的にどのような資質を養ってゆけばよいのか、その指針を具体的に提示した。自己研鑽スキルは、大きく分けて三点とし、学習者分析力、知識蓄積力、情報収集力とした。学習者を分析するには、多角的な評価基準をもつことが必要である。学習者が語彙不足でつまづいているのか、論理構成を追えないのか、論の枠組みが見えていないのか、といった問題点を見抜く力である。次に知識蓄積力とは、たとえば言語論について、あるいは身体論について、指導者自身の知識を教員としてのキャリアの中で培っていく力である。そのために必要となるのが情報収集力で、図書館・書店に足を運び、思想界・受験界への関心を持ち続け、学会・研究会で人脈をつくり、常に情報が入ってくる態勢を整えていくことが求められる。

これらの資質について、個々の受講生に具体的な中長期的スキルアップ計画を立てさせることとした。計画は例えば、一年後、三年後、五年後、十年後までに、語彙の教材データベースをどこまで蓄積し、評論の各ジャンルの勉強をどの順番で進めていき、研修・研究会・学会にはどの程度足を運び、といったかたちで立案させた。

四、「評論教材の研究」の成果と課題

ア) 評論「読解力」から評論「指導力」へ

各年度とも、初回授業では、簡単な評論の試験問題を二題用意して、一つは受講生に実力で解いてもらい、もう一つはわざと誤答を書いてもらい、その後受講生同士で先生役・生徒役のロールプレイにより、(模擬)読解指導を実践してもらった。

その結果、先生役は、誤答がなぜ誤りなのか説明できず、正答がなぜ正しいのかも説明できず、というケースが続出した。授業後のレビューには、次のような感想が述べられていた。

▼ 文の論理を理解することはできても、いざ教えるとなるとうまい言葉が出てこなくてもどかしかった。

▼ 正直に申し上げますと、漢字を教える部分からつまづいてしまいました。なぜこの漢字が間違いで、なぜこの漢字が正しいのか、を考えた途端に、自分の話す口が止まってしまったのがよくわかりました。

受講生のほとんどは、難問レベルに対応できる優秀な「読解力」を備えていて、学習塾でのアルバイト経験がある者も多かったが、「指導力」を客観的に検討する経験には乏しかったようである。「読解力」と「指導力」の間には意外に大きな懸隔があることを認識してもらったところから、半期の授業がスタートした。

そして半期の授業が終わった段階での感想には、「実践的」であったことを評価するものが多く見られた。

▼ 国語という教科の一領域である評論について扱う授業が他

に存在せず、その意味でこの授業の存在は貴重だと思えます。自分で評論教材を探してきたり、設問を作ったりと、普通であればだれから教わるでもなく教員一年目に行うことを学生のうちに学べるというのは大きな意味があります。

▼ 一般の教職課程の授業よりも、非常に実践的で将来自分が教師になった時にも使ってみたいと思えるようなメモソッドや資料を多く提示してもらえた点が有意義だった。

▼ 授業の内容は非常に高度で実践的であったように思う。課題をこなすための労力が多くかかったが、それに見合う内容を提示されたので非常に満足している。

その「実践的」の中身としては、一から教材開発をして模擬授業に至るまでを体験したことや、その過程で難易レベルを調節したことが印象に残ったようである。

▼ 教員になるにあたり、不足している部分を補う形の授業構成となっており、大変ためになる授業でした。自ら教材を発掘してそれを使った授業をするという課題が良い経験になったように思います。

▼ この科目では授業方法を中心に学んできましたが、とくに印象に残ったのは、教材の難易度を調節することや、授業の難易度を調節することでした。私にとってこれらはなかなか意識できていない部分だったので、授業中何度もつとさせられました。教員を志望する方にとって在学中にこの点を指摘していただけるのはとても貴重だろうなと思

ます。

一方、入試問題を作成した経験は新鮮だったようである。回答する側から、作問する側に回ることで、思いがけない発見があったようだ。

▼教材の選び方や入試問題の作成のしかたを実践的に学ぶことができ、とても良い勉強になりました。入試問題がこんなに大変だとは思いませんでした。

▼実際の入試問題作成のプロセスを体験できたことは大きな経験になりました。非常に大変でしたが自分の足りない部分を見つけられました。

(イ) 今後の課題

授業担当者として今後の課題を三点挙げておきたい。まず、多様性への対応である。一つは教育現場の多様性で、校種・学年によって評論教材の扱い方は大きく異なる。その違いを、カリキュラムに充分に反映することができなかった。さらに、受講生(学部学生)の「読解力」の多様性(ばらつき)があり、入試問題形式の多様性もある。例えば、(評論分野からは多少ずれるが)慶応義塾商学部入試の小論文のように、資料を経営学の観点から読み解いて回答する類のものを視野に含めるには至らなかった。

次に、時代的変遷への対応である。教科書教材も入試問題の傾向も時代とともに変遷してきた。同様にして、国語学力観・学習指導観も変遷してきて、今後もしていくであろう。その中で評論教材・評論指導の位置づけもまた変化せざるを得ない。そうした

変化をカリキュラムに織り込むことは困難であった。

最後に、カリキュラムが詰め込み気味であったことである。授業時間数に対して、扱う内容が多く、とくに入試問題作成は完成まで迫り着かなかった。そこで、「評論教材の研究」の派生科目の設置を提起しておきたい。入試評論に焦点化した科目と、評論教材開発・授業開発に焦点化した科目とに分離していく方向が望ましいと考えられる。

五、おわりに

(ア) 高校生は評論が「嫌い」

二〇〇五年に全国の高等学校三〇校、計三四〇七人を対象に行われたアンケートによれば、評論を「嫌い」・「大嫌い」と答えた生徒が計四十五%いた。この結果は、小説を「嫌い」・「大嫌い」と答えた生徒が計一〇%であったことと対照的である。

高校生はなぜ評論が嫌いなのだろうか。入試、指導方法、教材内容のどこかに、なんらかの構造的な要因が隠されているはずである。少なくとも、嫌いな高校生が半数近くもいるという現状を、これから教壇に立とうとする学生は認識しておくとういだろう。半数近くの高校生が「嫌い」・「だ」というジャンルを指導するには、自ずとそれなりの覚悟と工夫とが求められるであろう。場合によっては、指導者自身が評論を「嫌い」なのではないか、そしてそれはなぜか、と問い返すことも必要かもしれない。

(イ) 評論教材とは何か 評論教材は「論理的」か

評論教材はそもそも「論理的」であるだろうか。守田庸一によれば、「評論・論説文は論理的な文章である」という前提^⑧が国語教師には存在するものの、「論理」「論理的」の意味内容を（インタビュで）問われてはじめて考えているようで、あいまいな定義のままに用いていたという。一方、坂田達紀は、小林秀雄の「無常ということ」「平家物語」、清岡卓行の「ミロのヴィーナス」は、「論理性が特立している」とは言い難い^⑨。そのため、散文詩として読むべきだと主張している。

これまで代表的な評論教材だと考えられてきたものが評論ではなく散文詩だとするならば、では、何を評論教材とするのが適切であり、評論教材のどのような「論理」を指導するのが正統的なのだろうか。適切な教材を求めて、適切な指導をする、という問題意識を喚起すること、すなわち指導者自身の「国語力」観・リテラシー観の構築が不可欠である。

(ウ) 評論教材からクリティカル・シンキングへ

その意味で、個々の評論教材を、年間カリキュラムの中にどう体系づけて活かしていくかという観点が重要になってくる。教材の体系化に際しては、教材そのものの難易度と指導の難易度とを学習者に応じて調節するスキル、そして評論教材をそれ以外の教材（文学教材等）と連携させて相乗効果を生み出すスキル、さらに評論教材を表現活動（作文・音声言語・メディアリテラシー等）と有機的に組み合わせる実践の力量が求められる。それは、評論

教材をクリティカル・シンキングの観点から再構成していくことでもある。

(エ) 諸外国の動向

アメリカでは、二〇〇〇年代の教育改革 No child left behind が発展的に解消され、二〇一四年には Common Core State Standards が全面的に適用される段階を迎えた。これに伴って、アメリカの英語科教育では、文学教材 (literary texts) から非文学教材 (informational texts) へのシフトが加速しようとしている。従来からクリティカル・シンキングを育成するという潮流はあったものの、文学教材が支配的であった英語科教育に、教材面での地殻変動が起きつつあるといえる。この現象は、日本において、論理的な文章・実用的な文章の位置づけが高まっていった動きを後追いつているかに見える。

一方、韓国では二〇〇九年教育課程の実施段階に入っている。韓国の PISA 読解力の結果は、ほぼ常に一位グループに属しているが、韓国の国語科教育にみられる特徴的な構造は、読解力の育成が、小論文教育（論述式作文教育）の普及とそれに伴う読書教育の広まりとによって担保されてきたことである。読解力を作文力の向上によって保証するという手法は、日本の評論教材指導にとって示唆的な視点だと思われる。

- 1 注
平成二十五年度教員採用試験（二十年実施）の合格倍率（小中高・特別支援学校の合算）は、全国平均で5.8倍である。校種別に見ると、小学校4.3倍、中学校7.5倍、高等学校7.7倍となっている。過去五年間の東京都教員採用試験の受験倍率は、平成二十三年5.2倍、二十四年度4.5倍、二十五年度5.7倍、二十六年度6.3倍、二十七年4.8倍となっている。
- 2
「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」平成二十四年八月二十八日 中央教育審議会 三頁
- 3
『あたらしい国語科指導法 改訂版』学文社 二〇〇五年四月五日 四十五頁
- 4
たとえば浜本純逸は、言語の論理的思考を八種の要素（理性・比喩・範疇化・推論・判断・構造・分析総合・批評）に分解して、それぞれを発達段階（小学校低学年・中学年・高学年・中学校の四段階）に応じて系統化している。（浜本純逸「言語思考力育成系統化の一考察——『モアイは語る』を例に推論（対比と類比）の方法」『国語教科内容の系統性はなぜ100年間解明できなかったのか——新学習指導要領の検証と提案』科学的『読み』の授業研究会編 学文社 二〇一〇年八月二〇日 一四二頁）また、中井浩一は評論教材における論理的把握を、「対」「言い換え」「媒介」の三要素によって行う読解指導を提唱している。（中井浩一『論理トレーニング指導ノート』について 大修館書店 二〇一四年四月一日 一頁）
- 5
『評論入門のための高校入試国語』日本放送出版協会 二〇〇五年三月二〇日 二二～二三頁
- 6
「学び続ける教員像」の確立について、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」（中央教育審議会 平成二十四年八月二十八日）では「教育委員会と大学との連携・協働により」教員を支援する仕組みを構築する必要がある」としている。

- 7
『国語教科書教材の受容に関する実態調査——新教材の開発に向けて——調査報告書』（早稲田大学大学院教育学研究科 町田守弘研究室）二〇〇七年二月二十三日 二十四頁（評論が大好き3%、好き17%、普通35%、嫌い34%、大嫌い11%となっている。）
- 8
「国語科教師の評論・論説教材観——教材研究の記述とインタビューの記録から——」守田庸一 全国大学国語教育学会第一〇四回大会 発表資料 二〇〇三年五月二五日
- 9
「国語教材としての評論文について——より良い読解指導のために——」坂田達紀 四天王寺大学紀要 第五四号 二〇一二年九月
- 10
韓国のPISSA読解力の平均得点を二〇〇〇年から二〇一二年まで追うと、二〇〇〇年が525点（6位）、二〇〇三年が534点（2位）、二〇〇六年が556点（1位）、二〇〇九年が539点（2位）、二〇一二年が536点（5位）となっている。日本と同じく、習熟度別レベル1以下の生徒が少ない（低得点層が少ない）のが特徴である。

（早稲田大学高等学院）